平成３０年度第１回青梅市美術館運営委員会

平成３０年４月２３日（月）
青梅市立美術館研修室
会議時間 14:00～16:05
出席者　委員５名、教育長
教育部長、事務局４名

１　開　会
２　教育長あいさつ
３　委員長あいさつ
４　報告事項
(1) 平成２９年度事業結果について
事務局から説明　（了承）
(2) アンケート結果について
事務局から説明　（了承）
(3) 平成３０年度事業予定について
事務局から説明　（了承）
(4) その他
５　その他
次回委員会開催日程の調整

〔 主な質疑・応答・意見（報告事項について)〕
○展覧会の実施状況について
（委　員）各展覧会の入場者数が実施期間に比べてかなり少ないような気がする。これは作品の問題なのか、内容の問題なのか、あるいは宣伝の問題なのか。
（事務局）特段減っているわけではない。スタッフと予算の身の丈の中からできることを、活動した結果である。
（委　員）平成 29 年度の市民ギャラリーの利用者が過去の年度の利用者に比べて少ない理由は。
（事務局）市民ギャラリーは、年度末に開催する事業者が多く、２月、３月の休館による影響が大きい。また、毎年、入場者が多い平和事業写真展が図書館に会場変更したことで、千人単位で減っている。
○くん蒸消毒について
（委　員）くん蒸消毒の価格は高いと思うが。

（事務局）美術館のくん蒸消毒は、家庭のくん蒸とは違い、規模も大きく、美術品に使える薬剤も限られている。そのため、薬剤の効果を考えて、しかるべき業者にお願いしている。くん蒸消毒の実施に際しては、消毒する部屋はすべて目張りをし、その後、24 時間３日間かけてガスを入れる。その間は業者が駐車場に待機をしているが、そのような人件費のほか、使用する薬剤の量も、使用前、使用後で量を計り、チェックしながら行っていることを考えると、価格は特段高いわけではない。

○アンケート結果について

（委　員）何人かの方から、展示されている作品をもっと見たかったという話を聞いた。作品の数を増やすのは、壁の面積によって飾る点数は変わってくるが、別の２～３人の方からも、第１展示室に入った正面に壁があるのはいただけない、との話も聞いた。確かに広い展示室に壁があるいと狭く感じる。作品の数を増やすためには、壁を取り払うのも一つの方法かと思うがどうか。

（事務局）展覧会は基本的に数を並べるというよりは、文脈を作ってその物語の中で作品を鑑賞する、見てもらうのが主流である。第１、第２展示室を連続して鑑賞するとき、その中になぜ工芸があるのだ、という意見の方が多い。文脈を作る関係、または小島作品と藤本作品を常設する中で苦肉の策として今の住み分けになっていることにご理解いただきたい。ご質問の第１展示室入口の衝立は、空調を一定に保つ効果として正面の壁が空調の遮壁になっている。当館の入館者数からみれば、空調を守るために第１展示室、第２展示室の入口に自動ドアがあってしかるべきだが、構造上設置が困難なために第１展示室では衝立を使用している。美術館の空調メンテナンスをしている業者からも、衝立の効果を聞いている。30 年前の基準と、今求められる施設基準とは大きく異なっていて、機械類の老朽化も甚だしい中でどういうことをやっていけるかだと思う。中には、がっかり、という意見もあるが、入館料 200 円で見られる館はほとんどない。１回に対しての満足度ということであれば、内容によっては、意に沿わない方、量的に満足しない方はいらっしゃると思うが、費用対効果、面積のことを考えれば、それほどがっかり、と言われることはないのではないかと思う。

（委　員）第１展示室は市立美術館の管轄で、少なくとも建てられたときは、小島善太郎美術館は市立美術館とは独立した、名前も小島善太郎美術館となっている。アンケートの中に、小島善太郎美術館と書いてあるのに善太郎作品がないのはけしからんと言う意見があったと思う。独

立展に行っても、青梅ですと言うと美術館があるところですねと。個人の名前を冠した美術館は、その作品が常設されてなくてはいけないと思うがどうか。

（事務局）この美術館の開設のいきさつとして、小島善太郎さんからの寄贈品がほとんどでスタートした。その後、市の限られた財政状況の中で独立系の方を中心に手の届く範囲内で作品を買い求めて 30 年経過し、限られた所蔵品を中心に展示しているのが実情である。展示には青梅市立美術館の所蔵している作品をこまめに点検しながら工夫していることをご理解賜りたい。

（委　員）横須賀美術館の谷内六郎コレクションは、いわゆる横須賀美術館企画展とはまったく別棟の建物で展示している。このため、企画展を見に来た方が、谷内六郎の作品を見て帰る、ということができている。青梅市の場合、小島善太郎という、偉大な画家ではあるのだけれど、今の若者たちが、その魅力に惹かれて見に来るかということはまずあり得ないと思う。とすると、理想論ではあるが、第２駐車場の駐車スペースに小島善太郎記念館のような建物を造り、作品と歴史のようなものを集めて、１階は小島善太郎、２階は藤本能道、そしてそこにちょっとした講座ができるような施設をセットし、常にそこが、独立美術協会の方や陶芸家の方たちが来たりするような場を作る。このような住み分けをして、美術館の企画展は広い空間で集中してできるようにした方が、今後、10 年 20 年先の青梅市の文化の育成などを考えると、まだ美術館には可能性があると思う。今、行政では縮小することが問われているが、本当は、掛けるべきお金というのはそこであって、無駄なところは省かなければいけないが、数字には見えない教育を充実させないとどんどん疲弊していく。まだ、美術館の駐車場は整備されている訳でもなく、遊んでいる感じもするので、なにか有効的な活用が市の財政でできなかったら、財団を持っているところとか、青梅市で成功した企業に声をかけて、しかるべき文化の育成みたいなものに対して施設を充実させた方がいいのではないかと思う。

〇平成 30 年度の事業予定について

（委　員）ダンボールアート遊園地、すごく楽しそうなので喜んでいる。子供が対象だと、怪我があったときの対応が気になるが、参加型イベントになると、保険などその辺をお聞きしたい。また、美術館でアンケートを取られるが、ダンボール展のときだけはアンケートの中身を変えたら面白いな、と思った。若いパパやママが考えそうな中身を作ってはどうか。美術館に足を運ぶきっかけになるといいと思うのだが。

（事務局）普段は、来館者用の保険は掛けていないが、幼児、小学生が対象のダンボールアート遊園地は、保険を掛けることを前提に確認したい。また、アンケートの中身については、事務局で検討していきたい。

（委　員）夏の特別展では、トイレとか水飲み場とかが、若い親たちが特に感じるところである。子供たちは飲み物など、水分補強が絶対必要になると思うし、おむつ替えの場所、授乳場所など、心遣いのスペースがあってもいいと思うがどうか。

（事務局）おむつ替えに関しては、身障者のトイレの中におむつ交換台が設置してあるので、そこが使用できる。また、水を飲む場所は、床が絨毯敷きでないところで可能と思うが、検討させていただく。

〇その他

（委　員）アンケートの中で、谷内六郎展で、会話はやめてくださいと注意された、とあった。先日の新聞に、他の美術館または博物館で、曜日によって写真が OK、会話が OK との記事があったが、他人に方に迷惑がかかるような会話はいけないが、一緒に行った人とちょっと話す位はそれほど神経質になって、しゃべらないでくださいは必要ないのではないか、と思うがどうか。

（事務局）他のお客さんに迷惑がかからない程度の会話については、今日のご意見を参考にさせていただき、教育委員会の中で会話の可否を検討したい。

（委　員）子供たちにいかに美術館に来てもらうか、を考えたとき、過日、バルセロナという港町のジョアン・ミロ美術館に３月に行った時の事。３月は、いわゆる一般客の観光シーズンではなくて、地域の子供たちがバスを連ねて観に来る季節。鑑賞に際しては、引率の先生がミロの作品から、カタロニアのバルセロナという町の英雄としてピカソとダリとミロがいるんだよ、というような話から、この美術館は、次から次に来る子供たちに、１室ずつジャンル分けされた初期の作品、不詳絵画があり、その次にいろいろな影響を受けた絵画、そして、次第に抽象絵画になっていく、その解説を先生がすべて熟知していて、それで、いかにミロか素晴らしいかということを説明すると、子供たちが座ってちゃんと聞いている。強烈に感動したのは、一番最後の部屋にキャンバスに真っ黒い墨で描いた抽象絵画があって、スペイン語で日本人の名前が書いてあった。シュウゾウ・タキグチに捧ぐ、と書いてあり、日本人の美術評論家の瀧口修造さんが初めてミロという画家を発掘して評論を書いた、瀧口さんをリスペクトしている空間だった。そういったものを、この美術館ではちゃんと教えている。だから、青

梅の美術館でも、郷土の作家の作品がどうしてここにあって、どういうふうな影響力があるのかを本来説明しないと、来館者数が中々増えない、ということなのだと思う。子供のころから、そのようなイメージがなければ、美術館から離れてしまう。例えば、ダンボールアートに人は集まるのだけど、本当は、集めてきたらどういうふうに子供たちが興味を持ってもらえるか、その先のことを考えなければいけない。その辺の仕組みづくりを、やはりこれから日本もやっていかなければいけないのだと思う。アートというのは、自由に描くんだ、というのではなく、それぞれにちゃんと解説してあげれば、深みがあって、面白くて、人をリスペクトできるというような非常に世界感が広いものなので、ただ、表面的に観るのではなく、背景を説明するようなものが美術教育であるし、学芸員だけでなく、教育機関の中でやらなければいけないことなのだと感じた。

閉　会